
逢魔奇譚 夢籠り

葵夢幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逢魔奇譚 夢籠り

【Zコード】

Z9079P

【作者名】

葵夢幻

【あらすじ】

わて、「J来場の皆様。今日は夢にまつわる話でJやれ」や。夢と言つてもいろいろな夢がありやすが、夢は夢であつて決して現実ではございやせん。

ですがね、時にはそんな夢に籠もつてしまつ人が居るのでJやれやすよ。今回はそんな夢に籠もつた人の話でJやれやす。

いつものように渡り巫女が出てきやすが……今回も影が薄いでございやすね。ですが、今回も巫女には何かしらの企みがあるようだJやれやす。えつ、それは何かって、そりゃあお密さん。そこは本

編を読んでのお楽しみでござりますよ。

それでは逢魔奇譚 夢籠り。これより幕開けござります。

「来場のお客様。お初の方は始めて、再びお越しの方はあるがどうぞ」
「やす。

さて、実は昨晩のところあつしは変な夢を見やしてね。あつしが道を歩いてやすと後ろから見ても美人だと分かる娘さんを発見したんでやすよ。そうなりやあ、当然あつしは声を掛けやしたよ。「どうだい、ちよいとそこらでお茶でも」一緒にねえかい」とね。そしたら、その娘さんは振り返つて頷いたんでやすよ。

いや、その時に顔を見たんでやすけど、やつぱり美人さんでやした。そして、その娘さんと茶屋で一服してやしたんでやすけどね、娘さんが俯いてたんで声を掛けたんでやすよ。

「ちよいと娘さん、具合でも悪いのかい」ってね。そして娘さんがこつちを向きやすと、先程までの美人とは打つて変わつて、不細工な顔になつてやしてあつしは思いつきりびっくりしやして、危うく腰を抜かすところでやした。

そりやあ、さつきまで美人だつたお人がいきなり不細工になれば、誰だつて驚きでやすよ。けどその不細工な面を良く見てみやすとね。あつしのかあだつたんでやすよ。

とまあ、人は寝ている時に夢を見るものでやす。今回お話しするのは、そんな夢に関する話でやしてね。夢にもいろいろな物がありやす、吉夢やら悪夢やら、仕舞いには予知夢なんて占いみたいな夢もあるぐらいでやすから、夢を見るつて事には何かしらの意味があるんやしうね。

けどねお客様、寝ている時に見る夢は見るものでやすよ、決して現実では無いんでやすよ。けれども時には、その寝ている時に見る夢が現実かどうか分からぬ時があるんでやすよ。

昔にもこんな事を言つた人がいやしてね。その人は蝶になる夢を見て、目が覚めると分からくなつたと言つたんでやすよ。自分が

蝶になつた夢を見たのか、自分が蝶の夢のかど。

まあ、今回の話とは関係ないのでどっちでも良いんでやすけどね。肝心なのは夢と現実をしつかりと分けることやすが、中には夢なのか現実なのか分からない人が出てくるものやす。

だから今回お話しするのは、そんな夢に捕らわれた、夢に籠もつた人のお話でございやす。

さて、舞台はとある大店の商家になりやす。おおだなそこの若旦那は官助つて言いやしてね、つい最近になつて嫁を貰つたばかりでやした。その嫁はお静といつ、そりやあ、とても綺麗な人でやしてね。それに器量だけじやない、炊事裁縫とこれは良い嫁を貰つたと、官助の親である商家の旦那にあたる勘三郎も姑であるお香も喜んだものでございやす。

これで子が男の子が生まれれば店も安泰、勘三郎もお香も一安心していた時でやした。

それはとある朝に唐突に起こりやした。いつもなら朝食には誰よりも早く来て、下女と一緒に朝食の仕度をする事もある、お静がその日に限つては朝食が終わる頃になつても姿を見せなかつたのでござこやすよ。

どうしたのかと、夫の官助を始め、旦那も姑も嫁の様子を見に行きやした。そして三人がお静の部屋に入ると、そこには未だに寝ているお静の姿がありやした。

すでに朝飯が済んで、店を開ける刻限でございやす。これはすぐに起こさないと、三人はお静を起こそうとしやしたが、いくら声を掛けても、体をゆすつてもお静は起きやしやせんでした。最後には布団を剥ぎ取つて無理にでも立たせれば起きるだろつと、三人掛りでお静を立たせやすが、お静はそれでも寝たままでやした。

そんなお静を見て、こりやあ何かの病氣では無いかと官助はすぐに医者を呼ぶように下男に言い付けやした。けれども、医者の見立

てでは、ただ寝ていいだけで病氣とは言えないと云つのひのぞ「やこや」す。

それを聞いて首を傾げる事になつた二人で「やこやすが、医者が言つには、そのうち起きるだらうと言つ事で、とりあえずはお静を寝かせつけて、起きのを待つ事にしやした。

そして、それから三日が経ちやしたけど、お静は一回も起きる事無く眠り続けてやした。三日も寝続ければ、お静の体も自然と瘦せて行きやす。なにしろ寝たままで、何も口にしていいないのでやすから。そんなお静を見て、これは大変だと、病氣ではなく何かの呪いでは無いかと姑なんかは騒ぎ出す次第で「やこや」した。

そんな中で旦那の勘三郎だけが冷静で、店の者にお静の事を決して口外してはいけないとすぐに言い付けやした。けれども、人の口には戸は立てられないもので「やこや」してね。お静の噂は少しづつ、静かに広まつて行つたのでやす。

そしてお静が眠り続けて十日が経ちやした。未だにお静は寝たまま、夫の官助も旦那、姑も嫁の具合にすっかり困り果ててた時でやした。店の番頭が旦那に客が来ている事を告げてきたので「やこや」す。

そして番頭が言つには、どう見ても客ではなく、ただ旦那に話があるだけ言つだけで、詳しい事は一切話さないので「やこや」す。そんな者が店の中で今では腰を掛け、まったく動こうとはしないので、すっかり困り果てた番頭が「やこや」して旦那を呼びに来たという事でやした。

まったく、こんなになつだつて言つんだい。そんな事を思いながらも番頭の話を聞いて旦那はしかたなく、立ち上がると店へと顔を出しやす。

そして店に顔を出した旦那は思わず息を呑んで客を見詰めるのでやした。そこには腰を掛け、誰かが出したお茶を手にしてくる、

美しい巫女が居たので「いやーいやす。」
のようでやして、脇には商売用の背負い棚が置いてありやした。

そんな巫女に見瀉れてやすと、巫女の方から旦那に向かつて話しかけて來たので「いやーいやす。

「もし、失礼ながら、あなた様がここのはな様で「いやーいましょうか？」

そんな問い合わせに旦那は、はつと自分を取り戻しやすと、巫女の傍に座つて一礼すると巫女の言葉に答えてきやした。

「ええ、私がここのはなである勘三郎と申します。して、あなた様は渡り巫女のようだ」「いやーこますが、」用件は如何なもので「いやーいましょう」

たとえ不審そうな渡り巫女でも、こつして店に來たのだから密は寄。旦那の勘三郎はしつかりとした対応をしやす。そんな勘三郎に巫女は静かに微笑むと袂から扇子を取り出して、扇子を広げやすと、旦那に向かつて近くに来るよに扇ぎやす。

そんな巫女に旦那は訝しげな顔をしやすが、とりあえずは巫女に近づき、巫女が扇子で口元を隠してきたので、旦那は耳を巫女の口元へ持つて行くので「いやーこやした。そして巫女は静かにこつ旦那に告げやす。

「じつやー、若旦那の若奥様は夢に籠もつているよつです。私なら若奥様を起こす事が出来ますが、どうしますか？」

そんな事を告げてきた巫女の言葉に旦那は驚いた様子で巫女から離れやす。それから旦那は少しだけ考えやすと巫女をお静が寝ている部屋に案内する事に決めやすした。

旦那としては医者ですらサジを投げたぐらいでやすから、ここは神仏に頼りたいといつ気持ちもあつたので「いやーいやす」。だから旦那は藁にもすがる思いで巫女に頼る事に決めたので「いやーこやしょう。だからこそ巫女をお静の元へ案内したので「いやーいやす」。

巫女を連れてお静の部屋に入る旦那の勘三郎。そして部屋に居た若旦那の官助と姑のお香は旦那の後ろに居る巫女を不審な目で見やす

す。まあ、いきなり渡り巫女が尋ねてきたので「ござ」やすから一人が不審な旦で見てもおかしくは無いので「ござ」やすよ。

それから旦那は巫女に付いて一人に紹介しやすと、若旦那の旦が変わつて、巫女にすがり付くよつに頼るので「ござ」やすした。

「天の助けとは、まさにあなたの事。どうかお静を、お静を起こしてやつてください」

そんな若旦那の大げさな言葉に続いて旦那と姑も巫女にお静を起こしてくれるよう頼むの「ござ」やすした。

なにしろお静が眠り続けている事は誰も言いやせんが、すつかり評判になつてゐる事は旦那も分つてゐる事で「ござ」やすした。だから旦那も巫女がお静を起こしてくれるならと、すぐに商売人の顔を出しやす。

「巫女様、お布施ならいへらでも「ござ」用意します。だからお静を起こしてやつてください」

すぐに金銭の話にするといふは商売人の性とも言えるのでやしょう。だが旦那の言葉を聞いて巫女は意外な言葉を口にするのでやじた。

「いえ、金子は結構です。その代わりに……若奥様を起こすために必要な物を揃えて欲しいのです」

巫女の言葉に一同は驚くと同時に旦那は笑みを浮かべるのでやじた。なにしろ旦那はお静を起こすためなら、いや、世間体のためになら幾らでも金を用意するつもりでやした。それなのに金は要らないと巫女から言つて來たのでやすから、旦那にとつても巫女はあるで仏様、いや、力モノのように見えた事で「ござ」いやしょう。

これでお静が起きて、更に損をする事も無い。そうなれば万々歳で「ござ」いやす。だからで「ござ」いやしょう。旦那はすぐに巫女に対して言葉を返したのは。

「分かりました、必要な物はすぐに「ござ」用意しましょう。それで、何が必要なので「ござ」いますか?」

そんな旦那の問い掛けに巫女は必要な物を口にしやす。

「ひとまずは神の枝を四本、お静様の周りに立てて、その四本の神をしめ縄でお静様を囲むように吊るしてください」

巫女がそう言いやすと旦那はすぐに下男を呼びつけやして、すぐに巫女が言つた物を用意するよつに言い付けやした。下男も一人ではすぐに用意できないと、旦那の言葉を他の者にも告げて、すぐに用意するために店を飛び出して行きやした。

その間、姑のお香はよつほど心配だつたのやしじ。巫女に向かつて、これから的事を尋ねやした。

「巫女様、これからどのようにしてお静を起こすつもりですか？」

そんなお香の問い掛けに巫女は真剣な面持ちで三人に告げやす。「お静様は今、夢に籠もつてているのです。夢は黄泉とも言います、つまり夢とは現とは違う世、黄泉の国に行つてているのと同じなのです。ですから、私の力でお静様を黄泉から連れ戻しますが……」

そこまで言つと巫女は黙り込みやした。どうやら何か問題があるよつでございやす。その事を察したのでございやしじ。旦那も姑も巫女に何でも良いから、言つよつに促すのでやした。

その言葉を聞いて巫女は真剣な表情で三人の方へと振り返つて、座りなおしやすと三人が思わず唾を飲むほど緊張感を出しながら、口を開きやす。どうやらこれから言つ事が一番大事な事だ三人とも自然と察したように黙つて巫女の言葉を聞くのでございやした。

「一番大事なのはお静様が夢から、つまり黄泉から帰りたいと思う事です。そのためには夢に籠る原因が何なのかを知らなければいけません。ですから、お三方にはお静様が夢に籠もりそうな原因をお尋ねしなければなりません」

巫女がそう言いやすと三人ともお互いの顔を見合わせやす。そりやあそうでしょ、なにしろお静が夢に籠る原因と言われても困るのは当然でやしょ。原因が分かつていればとつくにお静を起こしてるのでやすから、その原因と言われても三人とも困つたよつな顔で何か無いかと話すのでございやした。

それでも三人にはお静が夢に籠る原因は検討が付きやせんでし

た。ですから、若旦那が巫女に向かつて尋ねやす。

「巫女様、私共にはお静が夢に籠もる原因は分かりかねます。ですから、巫女様のお力でお静を起^{おこ}す事は叶いませんか?」

そんな若旦那の言葉に巫女ははつきりと答えました。

「それは出来ません」

はつきりと告^のげられた事に若旦那は肩を落としやす。それでも納得が行かない旦那が巫女に問い合わせます。どうして夢に籠もる原因が必要なのかと。それを聞いた巫女は瞳を閉じて、静かに語り始めやした。

「現は幻、夜の夢こそ現。と申します、つまり、今のお静様にとつては夢こそが現なのです。そして現こそは夢。だからお静様は夢に籠もり、現を過^くごしているのでござります」

そんな巫女の言葉を聞いて三人はお互^{たが}いに顔を見合わせて首を傾げるのでやした。どうやら巫女の言つた事が良く分からぬようでござこやす。

まあ、それはそれで「じやこ」やしき。いきなりそんな事を言われても分かるはずがござこやせん。ですから、少しだけ説明しやすと、夢とはもつ一つの世界なので「じやこ」やすよ。だからこそ夢に籠もるということはでやすね、もう一つの世界に籠もるのと同じなのでござこやす。

つまりお静はただ寝てては無いのでやすよ。夢という現実に籠もつててはいる訳でござこやす。巫女も言葉を碎いて、時間を掛け、その事を三人に説明しやした。その言葉を聞いて若旦那は思わず憤怒するのでやす。

「そうするつていうと何かいつ! いつして私と夫婦の生活を送つているよつ、夢の中に居る方がお静は良いつて言うのかいつ!」

そんな事をお叫びになる若旦那で「じやこ」やした。それはそうでございやしょつ。なにしろ若夫婦は祝言を挙げてから数ヶ月の新婚でござこやす。それなのに嫁の方がそんな新婚生活よりも夢の中に居るのでやすから。夫である若旦那としては憤怒して当然と言えやし

よ。

憤怒する若旦那を必死になだめる姑。それでも若旦那の怒りは收まりやせん。それも無理もない事でございやしょう。なにしろ嫁は自分との生活よりも、夢に籠もつた生活を選んだのやすから。若旦那が怒つても当然でございやしきう。

けれどやすね、そんな若旦那を父親である旦那がしかりつけた事で、やつと若旦那は落ち着きを取り戻し、今ではまるで魂が抜けたようにお静の手を取りながら、静かにお静に向かつて帰つて来るよう語り掛けるのでございやした。

その間にも旦那が巫女に向かつて話しかけやす。

「大体の事情は分かりました。それでも私共にはお静が夢に籠もる原因は分かりません。巫女様、私共はどうしたら良いのでしょうか？」

そんな事を言いだした旦那に向かつて巫女ははつきりと告げます。「そうですか……原因は分かりませんか。それならばしかたないですね、準備が出来次第、私と一緒にお三方も若奥様の夢に入つてもらいます」

そんな事を言いだした巫女の言葉に三人とも大いに驚きやした。なにしろ夢の中に入るなんて事を聞けば、誰しもが驚く事でやしょう。ですが、その言葉は若旦那にとつては希望への道標に聞こえたのでやしょう。すぐに巫女の元へ行くと尋ねやす。

「本当にそんな事が出来るのですか？　夢の中に入つてお静を連れ戻す事が出来るのですか？」

少し興奮気味に尋ねてくる若旦那に対して巫女はしつかりと答えやした。

「ええ、私の力で若奥様の夢にござ案内します。ですが……どんな事があつても若奥様を強制的に連れ戻そととしてはいけません。それだけはお忘れないようにお願ひします。大事なのは若奥様が自分自身のお気持ちで帰ろうと決める事なのですから」

「はい、はいっ！」

巫女の言葉を聞いて若旦那は嬉しそうに一回も返事をした。そん

な若旦那を見て、親夫婦も一安心したかのようにな堵の表情を見せやした。何にしても、これでお静を起こす事が出来ると確信したので「ございやしょう。だから三人とも安堵の表情を見せたのでございやす……未だに巫女が真剣な面持ちなのに気付かないままにでございました。

そして店の下男が帰つてきやすと、すぐにお静が寝ている布団を囲むように榦の長い木が四隅に立てられやすと、榦の木を伝うようにしめ縄が結ばれていきやす。こうしてお静を囲むように榦の木としめ縄によつて隔離されたような形になりやした。それから巫女は旦那に告げやす。

「これから行うのは大事な神事です。なので、途中で誰かが入つてきては全ては水の泡。なので店の者には誰もこの部屋に入らぬように言い付けてください」

巫女がそう言うと旦那は番頭を呼び付けて、巫女が言った通りに店の者は誰一人として、この部屋に入らないように告げるのだった。そして番頭も主人に言われたとおりに、店の者に主人の言葉を告げて、完全にこの部屋は隔離されて、中にはお静を入れて五人だけとなつた。

「さあ、巫女様。これで準備は整いました。どうか、お願ひ申し上げます」

準備が整うと旦那が巫女を急かすように、そのような事を言うと巫女は頷き、次のような指示を出すのでございやした。

「それではお三人共、しめ縄の中へ。その中は結界となつておりますので、ご安心ください。結界の中に居る限り、お三人をお静様の夢へ連れて行く事が出来ます」

巫女がそう言つたので、三人ともしめ縄の中に入り、お静が寝ている布団の傍に揃つて座りやした。それから巫女は絶対に結界の外に出ないようになにを押すと、三人とも頷いたので、巫女はお静の夢

に入るため一枚の札を取り出しそうと、結界を築いているしめ縄に貼り付けて、それから結界の外から札に向かつて力を込めるように言葉を口にしやす。

「恐み恐み白さく、黄泉への道を塞いでいるお力、たいへん日々感謝に絶えぬ。道反の大神に白さく、そのお力を借りせんと白す。今、黄泉への道を開き、この者達を彼の黄泉へ導かんと、黄泉への道をここにお示しください。恐み恐み白す、そのお力を、今ここに

つ！」

巫女がそんな言葉を口にすると三人とも不思議な感覚を覚えたようで「ございやす。そして巫女の言葉が終わつた瞬間に三人とも、まるで氣を失つたかのようにお静が寝ている布団へと倒れるのでありやした。

そんな三人を見て、結界の外にいる巫女は大きく息を吐きやした。それから結界の中に居る三人を見ると独り言のように呴きやした。「どうやら上手く行つたみたいですね。それでは、最後の仕上げといきましょうか」

巫女がそう言いやすと巫女もまた静かに目をつぶり、まるで眠つたように座つたまま静かに寝息のようなものを立てるのでやした。

「な、なんだい、ここは？」

そこには三人とも見た事が無い長屋でございやした。巫女に言われたとおりにしていたのに、気付いたら、そのような場所に居たのでやすから、三人とも驚いた事でございやしそう。長屋にはしつかりと人の気配もしやして、人の出入りもありやしたが、誰しも三人がそこに居るのに気付かないようでやした。

「ここが若奥様の夢、お静さんが望んだ現でございます」

そんな言葉が聞こえてくると、三人は驚きの表情で後ろを振り返りやすと、そこには巫女が立つてやした。だからでございやしそう、旦那は真つ先に巫女に尋ねやした。

「なら、ここがお静の夢の中なのでしょうか?」

「はい、その通りで」「ざいます」

その言葉を聞いて若旦那が意気揚々と続いて巫女に尋ねやした。

「じゃあ、ここからお静を連れ戻せば良いのですね?」

「はい、その通りで」「ざいます。ですがお忘れなく、決して強制的に連れて行つてはいけません。お静さんが自ら帰りたいと思わなければ、決してお静さんを連れ戻す事は出来ません」

「分つてます、それでお静は?」

どうやら若旦那は相当気が焦つてゐるようだ「ざこやした。それも無理はありやせん、なにしろやつと女房を連れ戻す事が出来るので」「ざいやすから。そんな若旦那を見て、お互に手を取つて喜ぶ旦那夫婦。そんな三人を冷やかな目で見ながら、巫女はある方向を指差しやした。そのため、三人の視線が自然と巫女が指差した方向へと向かいやす。

そこには長屋に連なつた一軒の戸がありやした。どうやら、そこにお静が居るようだ「ざこやす。

そうと分かつたらと若旦那は駆け出して、その戸に向かいやすが、若旦那よりも早く、その戸が開きやすと一人の男が出てきやした。

「おひ、それじゃあ、行つてくらあ」

「あいよ、お前さん」

そんな声が聞こえてきて三人とも驚きの表情を示しやした。なにしろ出てきた男は三人とも見覚えがあり、中から聞こえてきた声は確かにお静の物だったからで」「ざいやす。そんな光景を目の当たりにしやしやして、若旦那は驚きながらも出てきた男を呼び止めるために手を差し伸べやすが、ここはお静の夢の中で」「ざいやすから、若旦那の手は男の肩に止まる事が無くて、すり抜けてしやいやした。そんな不思議な現象を旦那の当たりにしながらも、若旦那は静かに長屋から出てきた男の名前を静かに口にしやす。

「げ、源五」

どうやら若旦那である直助には長屋から出てきた男を知つてゐる

ようでありやした。そんな源五の後姿を見送ると若田那である官助は、そりやあ火でも付いたような勢いで長屋に踏み込んでいきやす。そして長屋の奥に居るお静の姿を田にしゃしゃすと、大きな声でお静に叫びかけるのでやした。

「お静っ！ お静っ！ これはいつたいどりこう事だつ！」

そんな叫び声を上げて官助はお静の元へ行きやすと、お静の両肩を力強く掴むのでやした。そんな官助と正反対にお静はまつたく状況が分かっていないようだやした。それどころか、いきなり姿を現した官助に対して他人行儀な口を開く始末で「ぞ」やした。

「えつ、か、官助さん？ どりこう事だつて、官助さんこや、どのようない用件でウチに？」

「なつ！」

それはまるで客人に対する言葉で「ぞ」やした。それが官助には衝撃だつたので「ぞ」やした。官助はお静の手を取ると、そのまま引っ張るのでやした。

もちろん、お静もいきなりの事であれ、官助に手を引っ張られたのだから、当然のように官助の手から逃れるために官助の腕を掴み、やつと官助の手を振り払うのでやした。

そんな状況に官助は呆然としてしやいやす。そりやあ、そつでございやしょ。なにしろ官助とお静は新婚。それなのにお静は夢の中で別の男と、それも官助の顔見知りの男と一緒に住んでいるようでやすから、官助がかんしゃくを起こして怒り狂つた後に呆然となつてもしかたありやせん。

そんな官助の後ろから田那夫婦も顔を出して、それぞれお静に向かって言葉を投げ掛けやす。

「お静、いつたいどうしちまつたんだい。ついこの間、ウチの官助と夫婦の契りを交わしたばかりじやないか。それなのに、これはいつたい、どういう事だい」

「そりだよお静。いつまでも、こんな貧乏染みた長屋に居ないでウチに帰つて来なさいよ」

旦那夫婦もそれぞれに言葉を口にしやすが、お静はまるで旦那夫婦が何を言つてているのか分からないと感じた感じで首を傾げるのでやした。それからお静は官助達にしつかりと告げるのでやした。

「官助さんも、勘三郎さんもお香さんまで何を言つてゐんですか？私が夫婦の誓いを立てたのは源五だけですよ。そりやあ、勘三郎さんには、そのようなお話も頂きましたが、そのお話はきっとぱりとお断りしたではございませんか？」

そんな事を言つてくるお静に、今度は旦那である勘三郎が怒つたよつに、お静に向かつて叫ぶのでございやした。

「何を言つてるんだお静。源五は……死んだじゃないか。だからお前は官助と夫婦の誓いを立てたのだろう。それなのにお前は、未だに源五の事を引きずつて、こんなところに籠もつてゐるのかつ！」

そんな事を怒りに任せて叫ぶ旦那の勘三郎でやしたが、お静はそんな勘三郎の言葉を聞いて笑いながら答えるのでございやした。

「何を言つてるんですか、勘三郎さん。源五は確かに生きてますよ、先程までここに居たし、つい先程、仕事に出かけて行つたところで「ござりますよ」

「バカな事を言つなつ！」

お静の言葉を聞いて官助が堪えきれないよつな叫び声を上げやす。それから官助はお静にすがりつくと情けない顔をしながらお静に向かつて話しかけやす。

「お静、源五は死んだんだ。もうこの世にはいないんだ。お前もそれを承知したから俺と夫婦になつたんじゃないのか。それを今更、源五がまるで生きているかのように夢に籠もつて、それでお前は幸せなのかい？」

お静を諭すよつに官助はお静を静かに説得しやす。ですが……官助の言葉を聞いたお静は今まで笑つてたのでやすが、急にその顔から笑顔が消えやすと、まるで官助を軽蔑するよつな目で見ながら、はつきりと言葉を口にするのでやした。

「いえ、源五は生きてますよ。それに……私は源五からしつかり

と聞きました。官助さんが……源五を殺そうとした事を。そして……
「その事実を勘三郎さんが隠そつとしている事を」

「なつ！」

あまりにも唐突な言葉に官助どころか旦那夫婦までもが驚きの声を上げやす。そして、そんな言葉を聞いて勘三郎も黙つてはいられないでやしき。お静に向かつて思いつきり叫ぶのでございやした。

「何を言つてるんだお静つ！ 官助が見ていたように、源五は官助と一緒に酒を飲んでて、その帰り道で源五は橋から落ちて死んだと官助も言つてるじゃないかつ！ お前もその話を聞いて諦めが付いたからこそ官助と夫婦になつたのだろう。それを今頃になつて、源五の事を持ち出して来るなんて……ええいつ！ 官助つ！ こうなつたらお静を無理矢理にでも連れて帰るぞつ！」

「おうつ！ 親父つ！」

このまま話を続けても埒が明かないと思つたのでござこやしきか、それとも別の事情があつたのでござこやしきか。官助と勘三郎は無理矢理にでもお静を連れ戻そうとお静の両腕を掴みやすが、お静の体はまるでお地蔵様のようになつておりやして、いくら引っ張り上げても立たせる事も出来やせんぢやした。

そんな状況に焦りを見せたのでござこやしき。旦那の勘三郎はお香にも手伝うように言い付けて、三人がかりでお静を立たせようとしやすが、鎮座したお静は大岩で出来たお地蔵様のようになつて重く。三人が掛かりでもお静を立たせる事が出来やせんぢやした。

いくら引っ張つても立たないお静に、先に根負けしたのは三人の方でやした。お静から離れやすと荒い息を整えやす。そんな三人に向かつてお静は静かに言つのでやした。

「何度も言つようですが……源五は生きております。だつて……官助さんが源五を橋から突き落とした事を私は源五から聞いたのですから」

「な、何だつて？」

もう叫ぶ気力すら残つて無いので「ございやしょう。官助は荒い息を整えながらも、何とか言葉を口にしやす。そんな官助に向かつてお静は冷やかな視線を送ると、はつきりと口にしやした。

「官助さん、よくも騙してくれましたね。源五が酔つて橋から落ちたなんて真つ赤な嘘。本当はお前様が源五を刺して、橋から突き落としたのでございましょう。私はその事を知ったからこそ、ここでは源五と暮らしているのでござります」

そんな言葉を聞いた官助は息が荒いままに叫ぶのでござこやした。それに続けとばかりに旦那もお静に向かつて叫びやす。

「どこの誰にそんな嘘を吹き込まれたかは知らないが、それこそが真つ赤な嘘だつ！ 僕は源五を殺してはいないし、お前に嘘を吹き込んだ訳ではないつ！」

「そうだ、お静つ！ 官助がそんな事をする訳がないだろう。それどころか傷心のお前を官助は優しく迎えてやつたのだぞ。お前はウチに恩はあつても仇は無いはずだつ！」

そんな事を叫ぶ一人でやすが、お静は静かに瞳を閉じやすく、まるでそんな言葉を信用しないかのように黙り込むのでござこやした。そんなお静に向かつて官助が更に語りかけやす。

「いいかい、お静。あの時は暗かつたし、俺も源五もかなり酔つていた。だから俺は源五を助けられなかつたし、源五が橋から落ちても不思議ではなかつた。それとも、私の言つている事が嘘だと断言出来る人がいるのかい」

「ここに居るや」

突如として後ろから聞こえてきた声に官助を始め、旦那夫婦が長屋の入口に視線を向けやすと、そこには威風堂々とした源五が立ていやした。それから源五は、その場から動くことなく、官助に向かつて語りかけやす。

「久しぶりだな官助。あの時の事はしつかりと覚えているぞ。なにしろ……俺もお前も酒なんて飲んでないんだからな。どうせ、あの後で服に酒を振りかけて酔つているフリをしたのだろうな。だから

こそ、誰もがお前の話を信じた

「げ、源五」

突然現れた源五がそんな事を言い出したので、官助も慌てて反論しようとするが言葉が浮かんでこないよりで「いやいやした。どうやら、源五が言つていい事の方が正しいようだ」やいやす。そんな源五が、あの時の真相を語り続けるので「やいやした。

「お前は俺に話があると言つて、あの高橋たかばしに呼び出した。あの川は流れが速くて、死体はどこまでも長く、深く流れで行くと考えたのだろうか。だからお前は隠し持つていた懐刀で俺の腹を刺して橋から突き落とした」

「ち、違う、お、俺は」

源五の言葉に官助は言葉が出ないよりで「やいやす。そんな官助をあざ笑うかのように源五は話を続けるので「やいやした。

「だがお前は一つだけあやまちを犯した。あの時、俺が完全に死んでから落とすべきだつたな。だがおかげで俺は命からがら生き残つて、偶然にも気を失つて川に浮いていた俺を商船の船頭が助けてくれたんだ。それに傷は急所を外れており、深手を負つたとはい、死には至らなかつた。だからこそ、俺はいつもやつて戻つてきたというわけだ」

「…………」

もう声も出ないので「やいやしょ。官助は源五を睨み付けながら、着物の裾を強く握り締めるので「やいやす。そんな官助に向かつて源五はまるで官助をバカにしたような言い方で言つのでありやした。

「そんな訳だ。官助、お前がお静に惚れてる事は知つてた。だがな、俺も素直に身を退く氣は無い。だからこそ、いつもやつて戻つてきたというわけだ。どうだ官助、自らの行いが水の泡になつた感想は?」「源五つ！」

そこまで言われては官助も黙つてはいられないのではしょ。官助は源五に向かつて行こうと立ち上がろうとしやすが、何かが官助

の体を押さえつけておつやして、官助はまったく動けないのを「じや」といした。

その時で「じや」とやす。姑のお香が悲鳴を上げやすと、官助も異常に氣付いたようだ。「じや」とやした。官助を始め、旦那夫婦の足元から無数の手が伸びており、その手が官助達をしつかりと掴んでいるので「じや」やす。しかも三人の足元は真っ黒な沼のようになつておらずして、その沼から出てきた手が、まるで引き込もうとしているのでありやすから、姑が悲鳴を上げても不思議ではありやせんでした。そんな光景を田の当たりにしながら、源五は笑いながら言つので「じや」とやした。

「どうだ官助、本当の事を全部打ち明けて、お静とも離縁すれば助けてやらなくもないぞ。どうだ、官助。自らの身に縄を打つて、お上に申し上げて、お静とも離縁するか？」

まるで官助を脅すかのように、源五は官助を見下して言つのでやすが。官助としては今更、源五の事を明るみに出す気はなれなかつたので「じや」とやしよ。それにお静を失うのも嫌なので「じや」とやしよ。官助は源五を睨み付けるだけで、体中に掴みかかつてくる無数の手を振り払う事無く、源五を睨み続けやす。

そんな官助とは違つて、勘三郎は源五の後ろに希望の光を見たようでやして、その光にすがるかのように手を伸ばしやす。

「み、巫女様つ！ ど、どうかお助けを。その悪霊を打ち払い、私共をお助けください…」

そんな事を源五の後ろにいる巫女に向かつて叫ぶ勘三郎。けれども巫女はゆつくつと源五の前に進み出ると三人に向かつて言つので「じや」とやした。

「先程も申したように夢は黄泉とも言います。黄泉、つまりは死者の国。ここは、そういうところなので「じや」とます。だから先程、何度も申しました。決してお静さんを強制的に連れて帰る「じや」はしないでくださいと。その執念が、黄泉の国、つまり、この夢に巣くう怨霊を呼び寄せて、引き込もうとするのです。だからこそ、私は最

初に尋ねました。お静さんが夢に籠もる原因を、それなのに、あなた達は源五さんの事を話もせず、ここに至つても自らの罪を認めません。もう、こうなつては私に出来る事はありません」

そんな巫女の言葉を聞いて官助には何かが閃いたので「いやいやしょ。官助は無数の手につかまれて、足元の暗闇に引き込まれながらも、巫女に向かつて叫ぶのでございやした。

「そつかっ！　お前達は最初からグルだつたんだなっ！　一人して俺達を騙したんだなっ！」

そんな官助の言葉を聞いて巫女は微笑みながら言葉を返しやした。「騙してはおりません……ですが、全てを話したわけでもあります。ただ黙つていただけの事、それに……源五さんはあなた達がお静さんを諦めて離縁するか、または自らの罪を認めるなら命までは取らないと決めておりました。ですが……残念な結果になつたようでござります」

そんな巫女の言葉を聞いて官助を始め、勘三郎もお番も巫女に向かつて罵声を浴びせ続けます。それでも巫女は静かに微笑みながら、暗闇に沈んで行く三人の姿を黙つて見送るのでありやした。微笑みながらも、少し悲しげな顔をしながらでござこやす。

「…………う、う、ん」

お静はゆつくりと目を開けると重い布団を押しのけて、上半身を持ち上げると、布団の上に座るのでござこやした。そんなお静に向かつて巫女は静かに語りかけやす。

「お田覚めになられたようですね、お静さん」

「…………あなたは…………夢に出てきた巫女さん」

巫女の姿を見て、そんな事を呟くお静でございやす。さすがに長い間も眠り続けてきたのでありやすから、すぐには目が覚めないのでございやす。ですが、巫女はそんなお静に着替えの着物を差し出やすと口早に言葉を発するのでござこやした。

「さあ、お早くこれに着替えてください。今なら店の者にも見付からぬで抜け出す事ができます。源五さんがいつものところでお待ちなので、お早く」

源五が待つていろと聞いてお静も田が覚めたので「いやこやしじう。すぐに起き上ると巫女の元へ、駆け寄りやすが、振り返ると布団の上で息絶えている官助達の姿を見て息を飲みやした。それは、しかたがない事で「いやこやしじう。なにしろ、今まで自分が眠つていた布団の上に倒れこむように官助達が息絶えてたので「いやこやすから。

そんな状況を見てお静はためらいを覚えやすが、巫女がお静を急かしやす。

「事情は後で説明します。今はこれに着替えてください」「ここ

巫女があまりにも急かしてくるので、お静は巫女の言つたとおりに着替えを始め、巫女もお静の着替えを手伝つてやるのでやした。どうもお静も心半分で分つていたので「いやこやしじう。夢の中での出来事が……すべて夢ではなく本当の出来事だという事をであります。

お静の着替えが終わりやすと巫女は静かに別の障子を開きやすと外の様子を窺いやす。どうやら番頭の命が行き届いているようですがして、この付近には店の者は居なこじうでありやした。それから巫女はお静を手招きして呼び寄せると、巫女はお静の手を取つて外廊下を静かに走り出しあした。

それから巫女達は店の裏側に回りやすと、巫女は背負つていた背負い棚を下ろしやすと、自分とお静の履物を出しやしてから、再び背負い棚を背負いやす。それから巫女達は店の裏口に向かいやすと、ここでも巫女は裏口を少しだけ開けやして、外の様子を伺いやすと人気が無い事を確認して、素早くお静の手を取つて店の外へと出やした。それから巫女とお静は一気に駆け出すので「ざいやした。お静と源五がいつも密会していた場所へと。

そこは人気の無い河川敷でやした。巫女はここまで来れば大丈夫

とお静の手を離しやすと、お静の前を歩いて、目的の場所を田指しやす。そこはいつも一人が落ち合っていた一本杉。その下で源五はお静と巫女の姿を見つけると姿を見せ、源五の姿を見たお静は源五に向かつて走り出すので「しゃこやした。

一人はすぐさま抱きしめ合い、お互の温もりを確かめるように、しっかりと抱き合いやす。そんな一人にゆっくりと歩いて行く巫女。そんな巫女の姿を見たのだろう。源五は一旦お静を放すと巫女に向かつて深々と頭を下げやした。

「巫女様、今回の一件、本当にありがとうございました。巫女様のおかげで、こうしてお静と再び会う事が出来ました。これも全て、巫女様のおかげです」

そんなお礼を言つてぐる源五に向かつて巫女は静かに語りかけやす。

「いいえ、私は任せられた仕事をこなしただけにすぎません。礼を言われる事なんて行つていないのでよ」

そんな会話をする巫女と源五そんな一人に挟まれてお静だけが事情が分らないとこう顔をしておりやす。そんなお静に気付いたのでありやしじう、源五は事のなりゆきを話すので「しゃいやした。

「お静、お前が眠り続けているという噂を聞いてからとつもの、全ての原因は俺にあると思って、何とかお前を起こす事が出来ないかと、ある方に事情を話したら。この巫女様を紹介してくださったんだよ。そこで巫女様にお前を起こしてもらおうと、巫女様は官助の店に出向いたんだ」

どうやら官助が最後に推察したどうつで「しゃこやした。巫女と源五は官助の店に顔を出す前から話が付いてあつたよつでありやす。そんな話を聞いて、お静もやつと納得が行つたので「しゃこやしじうか。夢の中での出来事が本当に結び付く出来事だと理解したようでござこやした。だからでござこやしじう。こんな事を言い出したのは、「でも、源五さん。なにもあそこまではやらないくても良かつたのでは？」

そんな事を尋ねてくるお静に源五も暗い顔を示す。

「ああ、俺もあそこまでやるつもりはなかつた。だが、しかたなかつたんだ。お前を起こすためには、お前が自らの意思で夢から出るか、代償として生贊を捧げるしかなかつたんだ。官助もお前と離縁さえしてくれれば……あんな事にはならなかつたのにな」

その言葉を聞いてお静もやつと源五の苦痛が分かつたよつて「じざいやした。確かに源五は二人を殺すつもりも、生贊にするつもりも「じざいませんであります。ただ、罪を認めてお静と離縁さえしてくれれば、お静も自らの意思で夢から去れる決意が出来たのでじざいやす。

だからじざいや、巫女は何度もお静を説得するよつて官助達に言つたので「じざいやす。官助達も源五の事を認め、お静と離縁さえしていれば、今頃は生きていた事で「じざいやしよ」。

けれども官助達は最後の最後まで自らの罪を認めはせず、強制的にお静を連れて帰ろうとしやした。それが運の尽きと言える事でござこやしよ。お静が夢に籠もり続ける、つまり黄泉に居続けるのなら、お静を連れ出すには、お静の代わりを黄泉に置いていかねばならなかつたので「じざいやす。

夢、つまり黄泉に籠もつた者を連れ出すには、自らの意思で出るか、あることは生贊を置いてこなければ夢に籠もつた者を連れ出せないの「じざいやす。

そんな話を聞いてお静もやつと納得したよつて「じざいやした。そんなお静を見てから、巫女は静かに源五の前に立つと手を差し出します。

「それでは、先日お渡しした札を返します」

巫女がそう言つやすと源五は懐から手を入れて、胸に貼り付けてある札を剥がしやすと取り出して驚きの表情を見せやした。それはそれで、「じざいやしよ」。なにしろ、数日前に巫女が源五に札を渡した時には、札にはしっかりとした紋様と呪文が書かれていたので「じざいやすから」。

その札が今では真っ白になつてゐるので「ございやす。だから源五が真っ白になつた札を見て驚いても不思議では無いのでございやす。そんな源五を見て、巫女は静かに言いやした。

「先日も申したとおりに、もし生贊が必要になつた場合は呪いを掛けると申しました。人を呪わば穴一つと申します。ですから、の方達が生贊となつたからには、あなたにも代償を支払つてもらわないといけないのです」

「それが……これですか」

そう言つて源五は胸元を大きく開いて、自らの胸に刻まれた紋様と呪文を巫女とお静に見せるのでありやした。それを見た巫女は頷きやす。それから少しだけ微笑んで告げるやした。

「ですが……それは天命尽きた後の事でございします。生きているつちは支障はありません。ただ、死んだ後は地獄に落ち、罪を償つまで苦しみ続ける、その証でござります。まあ、全ては死んだ後の話ですけどね」

そんな事を言つて来た巫女に源五は真っ直ぐな瞳で巫女に向かつて頷きやした。どうやら源五には地獄に落ちる覚悟がすでに出来ているようございやす。

なんにしても、これで今回の事は全て終わりと巫女は源五にこれから事を尋ねやした。

「お一人は、これからどうする、おつもりですか？」

そんな事を尋ねてきた巫女にお静は困惑の色を見せやすが、源五はそんなお静の手をしっかりと握り締めると巫女に向かつてしつかりと答えやした。

「「」より北の地に私の親類縁者が居ます。まずは、その方を頼つて、これから事を考えようと思つてます」

「そうですか、ならば私は西に向かいましょう。この仕事は一期一會、一度受けた依頼人とは一度と会わぬのが暗黙の掟ですから。

それでは、お一人の幸せを遠き地よりお祈りしております」

「はい……ありがとうございました」

そんな会話を最後に巫女は源五とお静に別れを告げ、巫女は「の二人と再び会う事は」「ざいやせんでやした。

さて、如何でしたしょつか。これが夢籠りの話で「ざいやす。えつ、何ですつて？ その後の二人はどうしたかつて。そりやあ、お客様さん、そこはお客様の想像する事で「ざいやすよ。一人が幸せに暮らしたか、それとも不幸な結果を迎えたか、どちらにしろ私共には分からぬ事で「ざいやすよ。

まあ、どちらにしても、短い時間であれ、長い時間であれ、二人が幸せな時間を過ごしたのは間違いない事で「ざいやすしょう。

けど、横恋慕もここまで行けば悲劇しか生まない物で「ざいやすね。愛し合っている一人を引き裂いても、決して幸せにはなれないもので「ざいやすね。それどころか、夢に籠もられて、こっちが夢に引きずり込まれるかもしれやせん。

皆々様には、どうか夢に籠もる事が無い様に願い申し上げやす。ですがね……これが一つ、夢に籠りたい時があるんで「ざいやすよ。えつ、それは、どんな時かつて？ そりやあ、決まってやすよ。夫婦喧嘩をして一度と返つてくるなど、家を追い出された時で「ざいやす。

さて、それでは夢籠りの物語はこれにて終わりとなりやす。最後まで「静聴いただき、ありがとう「ざいやすした。それでは、再び出会える事を願つて、これにて幕引きとさせていただきやす。皆々様、次回のご来場をお待ちしております。それでは。

(後書き)

さてさて、そんな訳で逢魔奇譚の四作目を迎えた。いやはや、なんと言つか……今回の渡り巫女はいつも以上に影が薄いですね。けど、まあ、しかたない、逢魔奇譚での渡り巫女の役割は最後まで観察者なんですかね。……今、考えたんですけど……合つてますよね？　まあ、合つている事にしましょう。

そんな訳で、長期間も空けてしまった逢魔奇譚シリーズですが。まあ、無事にこうして四作目を迎えて一安心しております。というか……少し思つたんですね。あ、そろそろ短編でも書いて気分転換したいな～って。

という事で、今まで頭の中にあつた今回の話を形にさせて頂きました。まあ、今回の話はとあるアニメを参考に考えたんですけどね。あ、たぶん、調べても無駄だと思いますよ。なんせ……かなり前のアニメですか。それに原作は少女漫画なのかな？　まあ、そんな感じのところから、今回の題材を頂きました。そんな訳で、ネタとなつた話を書いてくれた人、ありがとうございます。

はい、すいません、次回からは完全オリジナルで挑もうと思つてます。だから止めて、エアガンでこっちに向かつて発砲しないでっ！　地味に痛いから止めてくれ～っ！！！　……はい、いつも戯言もこの辺にしておきますか。

さてさて、そんな訳で無事に四作目を迎えた逢魔奇譚シリーズですが……次は……いつものように、いつになるかは分かりませんっ！！！　というか……次の話になるネタなんてまったく思いついてないっ！！！　まあ、そんな訳で、逢魔奇譚シリーズはあまり期待せずに、次を気長にお待ちくださいな……というか……本当に次のネタが無いんだけど。このままだと、これで終わりになつてしまつ。けど、まあ、なんとかなるよね。

まあ、そんな感じで次が……有るかどうか分かりませんが、期待

せすにお待ちくださいな。そんな訳で、それから長くなってきたので締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そして他の作品もよろしくお願ひします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、夢に籠もりたい……って、時々思つたりする葵夢幻でした（笑）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9079p/>

逢魔奇譚 夢籠り

2011年1月3日11時55分発行